

青年期における「自立」と生きがい感：心理的自立と 対人依存欲求の視点から

平田, 陽子
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/18458>

出版情報：九州大学心理学研究. 11, pp.177-184, 2010-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

青年期における「自立」と生きがい感

— 心理的自立と対人依存欲求の視点から —

平田 陽子 九州大学大学院人間環境学府

The “independence” and the feeling of something to live for in adolescence

Yoko Hirata (*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The first purpose of this study is to examine the ideal way of adaptive independence in adolescence by clarifying the relationship among the feeling of something to live for, “independence”, and dependency. The second purpose is to examine various states of “independence”. The influence that independence and dependency have on the feeling of something to live for was examined. It shows that the feeling of something to live for becomes higher as a person is more independent, whether the person is dependent or not. In the second research, the balance between independence and dependency, dependence-object, and the rates of satisfaction were examined. It shows that the person who is “Independent” has great satisfaction, which is one side of the feeling of something to live for. Therefore, adaptive independence is that both independence and dependency exist and keep the balance.

Key Words: adolescence, independence, dependency, the feeling of something to live for

I 問題と目的

1. 青年期における自立

青年期は児童期と成人期の間に位置し、自立を志向するようになる時期である。しかし近年では、いつまでも親元を離れないパラサイト・シングルや、働かず学生でもなく職業訓練にも参加しないニートなどの現象も稀ではなくなり、現代青年の自立の難しさが指摘されるようになってきた。だが依然として自立は青年期のもっとも重要な発達課題のひとつであり (Havighurst, 1953)、母子分離や心理的離乳、自我同一性などの青年期の諸問題はいずれも自立の問題と深い関わりを持っている (渡邊, 1990)。

かつては自立というと個の確立を示すものと考えられていたが、近年では他者との関係性の中で個人の発達を捉える重要性が指摘されている (Gilligan et al. 1982)。すなわち、自己の個性性を確立させているだけでは自立しているとは言えず、他者と適切な関係性を築くことができるようになって初めて自立した大人になれるのである。このように自立について他者との関係性を重視する立場は、特に国内の研究において顕著に見られる。たとえば、心理的自立の下位尺度として、福島 (1992) は「協調・社会的能動性」、「友人関係の確立」を示し、高坂・戸田 (2006) は「適切な対人関係」を挙げている。このように特に日本において他者との関係性を強調する理由として、欧米諸国との文化的背景の違いがあると考えられる。Markus&Kitayama (1991) は、欧

米諸国では自律性、独自性、創造性が発達課題として挙げられる相互独立的自己観を持つものに対して、日本をはじめとする非欧米諸国では協調性、共通性、相互依存性を発達課題とする相互協調的自己観を持つことを示している。このような文化的背景から、日本における自立を考える際には、他者との関係性も含めて考えるほうが妥当であると思われる。したがって本研究においても、個の確立だけを強調して青年の自立を捉えるのではなく、他者と適切な関係性を築くことができるという視点も含めて、青年期の自立を捉える必要があると考える。なお、本研究では青年期の心理的発達に着目することから、そのなかでも心理的自立を取り上げたい。なお心理的自立について、高坂 (2003) はそれまでの自立についての定義を概観したうえで、青年期における心理的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態」と定義している。本研究では高坂 (2003) の定義を用いて、青年期における自立について研究を進める。

2. 自立と依存性

かつては自立の対極概念として依存性が挙げられることが多く、依存から独立・自立へという発達の方向が暗黙のうちに仮定されていた。しかし現在の青年心理学においては、もはや自立と依存性を対極概念と捉えてはいない。たとえば加藤・高木 (1980) は、特に高校女子において、「親への依存性」尺度と「独立性」尺度の得点が共に上昇する傾向にあることを示し、親への依存性が

独立性の獲得の障害にはならないことを示唆している。また福島(1993)は、特に女子青年において自立と依存が矛盾なく存在し、適度に他者に頼るという相互依存の基盤に立った自立を見出した。以上のことから、自立は依存と対極概念をなすものではなく、それらは共存しながら発達していくという方向性を見出すことができる。

これらを踏まえて、適応的な自立とは独立性のみが強調されるものではなく、他者への適度な依存性も持ちつつ、自立と依存性のバランスを保っていることだと考えられる。したがって青年の自立について見ていく際にも、自立と依存性双方の視点からアプローチし、両者のバランスや統合性の観点から見ていく必要があると考えられる。しかしこれまでの研究では、自立と依存性は対極概念ではないと理論的には認めているものの、自立と依存性双方の視点から見ている研究は見当たらない。そこで本研究では、青年の自立を依存性とのバランスから見るという点で、独立性が強調されたこれまでの自立と区別して新たに「自立」とし検討していく。また「自立」している青年とは、自立と依存性がともに高い青年であると仮定する。

3. 青年期における依存性

青年期以降を対象とした依存性についてのかつての研究では、依存的な人は自信がなく、自己決定できないなど、退行的な心性としてその病理に注目したものが多かった(江口, 1966)。しかし、依存性が問題になるのはそれが過度であったり病的な場合であり、最近の研究の動向を見てみると、不適応的な依存だけではなく依存の適応的な側面に注目する研究もなされるようになった(たとえば高橋, 1968)。高橋(1968)は、依存は発達とともに変容しながらも存在し続けるものであり、自立の獲得・増大に必要なものであるとし、青年期における依存性の積極的意義を示している。また竹澤・小玉(2004)は対人依存欲求の高い人ほど、他者信頼感や自己信頼感が高くなることを示し、対人関係において積極的で適応的なものとしての依存性を見出した。このように依存性とは必ずしも不適応的なものではなく、むしろ自立の発達や互恵的な人間関係を構築する際に、必要不可欠な概念であるということが示唆される。そこで本研究では、依存性の適応的な側面に焦点を当てたいと考える。なお適応的な依存性に言及するものとして、竹澤・小玉(2004)は情緒的・道具的依存からなる対人依存欲求尺度を作成し、対人依存欲求を「是認、支持、助力、保証などの源泉として他人を利用しないし頼りにしたいという欲求」と定義している。本研究においても竹澤・小玉(2004)の定義にならう。なお多くの研究において、女子青年は男子青年よりも依存性が高いことが示されていることから、本研究でも女子青年のほうが男子青年より

も対人依存欲求が高いという仮説に基づき検討を行う。

また依存性の適応的意義に注目した研究として、竹澤(2008)は依存性が適応的に機能するために重要な要因を「相互依存性」、「依存状況においても自己決定や自律性を失わないこと」、「自分が依存することを受容すること」、「対象、場面、課題によって柔軟な依存が出来ること」の4つにまとめている。また依存対象について、久米(2003)は人は成長とともに、乳児のように特定少数の対象(主として母親)だけに集中した依存を示すのではなく、複数のいろいろな人物と、いろいろな形で依存関係を結ぶようになると述べ、依存の対象と様式の分化は青年期に最終段階に達し、両親やきょうだい、友人、恋人などがそれぞれ異なった機能を与えられ、分化した位置を占めるとされている。このように一口に依存性といっても、その構造や成熟度、対象など、さまざまな質的差異があることが示唆され、依存状況や依存対象などについても考慮し、包括的に見ていく必要があると考えられる。

4. 青年の生きがい感

青年期は自立に伴って、自らの発達課題にも取り組むようになる時期である。Erikson(1982)が青年期の発達課題である「自我同一性対我同一性拡散」の構成要素として、「時間的展望の獲得対拡散」を挙げているように、青年期は時間的展望の獲得期とされ、自己の人生に対して時間的な視野が広がる時期であると考えられている(日湯・齊藤, 2007)。そのため青年は自立を獲得していく中で、自分の人生について現実的に考えるようになり、人生に対する意味や意義を見出すようになるのではないだろうか。自分の人生に対する意味や意義、すなわち生きがいを問い、見出していくことは、その後の人生においても重要な意味を持ち、全生涯に関わる問題であると考えられる。また生きがいを持つことは、人間の発達にとって不可欠なもので、臨床援助における心理療法の究極目標の1つとされている(久留, 2003)。よって、発達段階にある青年の生きがいについて検討することは、臨床的にも意義のあることだと言える。この生きがいを追求する心理作用を示す概念として、本研究では生きがい感に着目したい。

生きがい感とは生きがいを感じている精神状態を意味し(神谷, 1966)、佐藤・田中(1971)は生きがい感を、「価値ある目標に向かって努力していく過程で生じる充実感」、あるいは「目的を達成したときの満足感、それに伴う生の実感、喜び」と定義している。生きがい感とはしばしば充実感や幸福感などの生活感情と混同して取り扱われてきたが、山野(1991)は生きがい感とは、はりあい・充実感・使命感・生の実感・達成感・連帯感・成長感・効力有能感・満足感・幸福感・喜び・躍動感・自

信・可能性などを含み、単一の感情というよりも、これらの複合体であるとしている。さらに近藤・鎌田(1998)は、従来の生きがい感としては捉えられてこなかった享樂的側面についても言及している。以上のように、生きがい感とはさまざまな生活感情によって説明され、ポジティブな生活感情全体を包括する概念であると言える。さらに生きがい感が自我同一性統合の方向と対応している(大野, 1984)ことも踏まえ、本研究では生きがい感を青年の適応の指標として用いる。

近藤・鎌田(1998)は、大学生を対象に生きがい感スケールの作成を行い、生きがい感を「自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲をもつ過程で感じられるものであるが、人生を楽しむ場合にも感じられるもの」と定義している。本研究では、より包括的な視点から生きがい感を捉えるため、近藤・鎌田(1998)の定義に従い、適応指標としての生きがい感について検討していく。

5. 本研究の目的

以上の問題意識から、本研究では青年期における「自立」を自立と依存性が共に高い状態であると捉え、青年期における「自立」が適応指標である生きがい感に与える影響を検討する(第一研究)。また青年の「自立」の様相について、自立と依存性のバランスや依存対象などを質的に明らかにすることにより、探索的に検討する(第二研究)。

II 第一研究

1. 目的

青年期における「自立」を自立と依存性が共に高い状態であると捉え、青年期における「自立」が適応指標である生きがい感に与える影響を検討する

2. 方法

調査対象 大学生・大学院生 251名(男性 131名, 女性 120名; 平均年齢 20.18歳, $SD = 1.87$)

調査内容

心理的自立尺度(PJS-2): 高坂・戸田(2005)が作成した、青年期の心理的自立を測定する尺度。「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現在把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」の5因子、29項目からなる。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で尋ねた。

対人依存欲求尺度: 竹澤・小玉(2004)が作成した、青年期の依存性を測定する尺度。「情緒的依存欲求」「道具的依存欲求」の2因子、20項目からなる。「いつも思う」から「全くそう思わない」の4件法で尋ねた。

生きがい感スケール: 近藤・鎌田(1998)の作成した、青年期の生きがい感を測定する尺度。「現状満足感」「人生享樂」「存在価値」「意欲」の4因子、31項目からなる。「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で尋ねた。

調査時期 2008年10月~11月に実施した。

調査手続き 大学の講義後、集団で実施した。

分析方法

各尺度について、それぞれの尺度の因子構造を明らかにする。そして心理的自立尺度、対人依存欲求尺度について、High群とLow群(以下H群, L群とする)に分類し適応指標である生きがい感に与える影響を検討する。さらに両尺度のH群, L群の組み合わせから4群に分類し、各群が生きがい感に及ぼす影響を見る。なお両高群を「自立」している群とし、以下のような仮説を立て、仮説検証的に検討する。

仮説1 男性よりも女性のほうが、対人依存欲求得点が高い

仮説2 「自立」している青年(両高群)は、そうでない青年よりも生きがい感得点が高い

3. 結果

(1) 心理的自立尺度の検討

1) 因子分析

29項目からなる心理的自立尺度について因子分析(プロマックス回転)を行った結果、「価値判断・実行」「自己統制」「自己理解」「将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」の6因子が抽出された。

2) 各下位因子得点の性差

性差を検討するため t 検定を行った結果、「自己統制」について男性の方が女性より有意に高かった($t(246) = 2.59, p < .05$)が、その他の下位因子得点や合計得点に差は見られなかった。学年差による差は見られなかった。

(2) 対人依存欲求尺度の検討

1) 因子分析

20項目からなる対人依存欲求尺度について因子分析(プロマックス回転)を行った結果、「情緒的依存欲求」「道具的依存欲求」の2因子が抽出された。

2) 各下位因子得点の性差

性差を検討するため t 検定を行った結果、女性のほうが男性より有意に高く($t(246) = 2.45, p < .05$)、「道具的依存欲求」についても女性のほうが男性より有意に高かった($t(246) = 2.82, p < .01$)。学年差による差は見られなかった。

(3) 生きがい感尺度の検討

1) 因子分析

31項目からなる生きがい感尺度について因子分析(プロマックス回転)を行った結果、「存在価値」「意欲」

「現状満足感」「人生享楽」の4因子が抽出された。

2) 各下位因子得点の性差

性差を検討するため t 検定を行った結果、女性のほうが男性より有意に高かった ($t(246) = 2.87, p < .01$)。また「意欲」「人生享楽」について女性のほうが男性より有意に高かった (「意欲」: $t(246) = 2.04, p < .05$; 「人生享楽」: $t(246) = 6.15, p < .01$)。学年差による差は見られなかった。

(4) 「自立」と生きがい感

心理的自立得点と対人依存欲求得点がともに H 群である両高群、心理的自立得点が H 群で対人依存欲求得点が L 群である自立群、心理的自立得点が L 群で対人依存欲求得点が H 群である依存群、心理的自立得点と対人依存欲求得点がともに L 群である両低群の4群に分類し、生きがい感得点との関連を見るため一要因分散分析を行った結果、群間に有意な差が見られた ($F(3,99) = 22.48, p < .001$)。Tukey の HSD 法 (5%水準) による多重比較を行ったところ、両高群・自立群はともに依存群・両低群より有意に高かった (Fig. 1)。

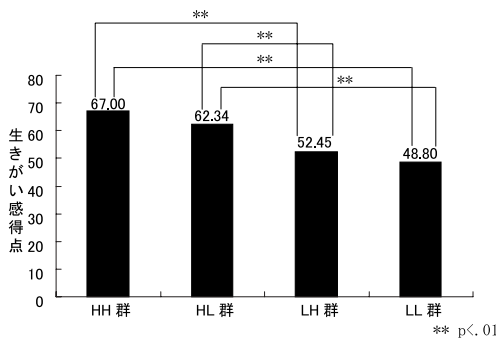


Fig.1 「自立」群別の「生きがい感」得点

3. 考察

(1) 心理的自立について

1) 各下位因子得点の性差

性差について、「自己統制」において男性が女性よりも高かった。このことから、男性のほうがより自分の感情をコントロールし、自分や外的事象を客観的に見ることができるということが示唆される。いくつかの自立に関する先行研究においても男女差の存在が示唆されており (加藤・高木, 1980 など)、男女の社会的状況を背景とする違いによるものと指摘されている。しかしそれ以外の下位因子得点や心理的自立尺度の合計得点について性差は見られなかったことから、心理的自立についての性差は従来よりも減少していると推測できる。その理由として、女性の社会進出や高学歴化など、女性が社会において男性と台頭の位置を占めるようになったことで、

ジェンダーに対するステレオタイプが変化したことなどが挙げられるだろう。

(2) 対人依存欲求について

1) 各下位因子得点の性差

対人依存欲求尺度の合計得点、道具的依存欲求において、女性は男性よりも高く、すなわち仮説2は支持された。この背景には、社会的・伝統的性役割観が影響していると考えられる。社会的に男性は女性よりも、独立心が強いことを期待されており、他者に頼ることは望ましくないこととされる。そのため、男性のほうが女性よりも対人依存欲求が低いという結果になったのではないだろうか。また質問紙による調査であるゆえ、社会的望ましさにより回答が歪められた可能性も否定できない。ほかに、今回用いた尺度が飽くまで「対人依存欲求」を測るものであったため、実際の依存行動とのズレの影響も考えられる。そこで第二研究において質的な部分における差異を見ていくことが必要とされる。

(3) 生きがい感について

1) 各下位因子得点の性差

生きがい感尺度において女性のほうが高かったことから、概ね女性のほうが男性よりも生きがい感を強く感じていることが明らかとなった。いくつかの青年に関する研究で、ポジティブな生活感情について、性差の存在が指摘されている。たとえば板垣 (2000) は、生きがい感について「ふだん退屈ききっている」、「生きることは全くつまらない」などネガティブな項目について男子青年のほうが回答が高くなることを指摘している。また生きがい感と似た概念である充実感について、二宮 (1994) は女性は男性よりも充実感を強く感じていると示している。さらに最近大学生のアパシーについて論じられることが多いが、このアパシーも男子学生に多く見られるものである。以上より特に青年期において、女性は男性に比べ人生や生活に対して積極的に捉えていることが窺われ、生きがい感が男性よりも高くなったのではないだろうか。

(4) 「自立」と生きがい感

心理的自立、対人依存欲求の H 群・L 群の組み合わせによるグルーピング (以下「自立」群と記述する) と、生きがい感との関連を見た結果、両高群・自立群はともに依存群・両低群よりも生きがい感が高いことが示された。すなわち対人依存欲求の高低に関わらず、心理的自立の高い青年は、低い青年よりも生きがい感が高くなる解釈され、仮説1は十分には支持されなかった。対人依存欲求の H 群、L 群による差が量的に示されなかったため、第二研究でその質的な側面を見ていくことにより、仮説の検証も踏まえて引き続き検討していきたい。

Ⅲ 第二研究

1. 目的

青年の「自立」の様相について、頼る対象としての自分と他者の割合、依存対象として挙げられる人物の数や割合などを質的に明らかにすることにより、探索的に検討する。

2. 方法

調査対象 第一研究と同じ

調査内容 以下の6項目で自由記述を求める。

- (1) 普段自力で解決する割合と他者に頼る割合を、「自分」と「他者」の割合として円グラフで記述を求める（「自分」 自立の割合、「他者」 依存性の割合と考える）
- (2) の円グラフについての満足度（5段階評定）
- (3) の円グラフについて理想とするグラフ
- (4) 頼りにしている身近な人物（親、友人、恋人など）の、全体に占める割合を円グラフとして記述を求める
- (5) の円グラフについての満足度（5段階評定）
- (6) の円グラフについて理想とするグラフ

調査時期・調査手続き 第一研究と同じ

分析方法

頼る対象としての自分と他者の割合、依存対象として挙げられる人物の割合、またそれぞれ理想とする状態のグラフについて、性別、「自立」群に注目して平均比率を求める。さらにそれぞれ現状に対する満足度についても平均値を求める。

3. 結果

(1) 頼る対象としての「自分」と「他者」の割合

1) 基礎集計

現状と理想とする状態について、頼る対象としての「自分」と「他者」の平均の比率を算出した結果をFigure 2に示す。また現状に対する満足度は、5点満点中3.28 ($SD=1.16$)であった。

2) 性差の検討

性差を検討するため、マン・ホイットニーの検定を行った結果、男性のほうが女性より「自分」の割合が有意に高かった ($U=6224.00, p<.05$)。

3) 「自立」群差の検討

「自立」群差を検討するため、クラスカル・ウォリスの検定を行った結果、有意差が見られた ($H=33.76, p<.01$)。再度のU検定により自立群は両低群、依存群、両高群よりも「自分」の割合が有意に高く（順に $U=178.00, p<.05$; $U=109.50, p<.01$; $U=130.00, p<.01$ ）、依存群は両高群、依存群、両低群よりも「自分」の割合

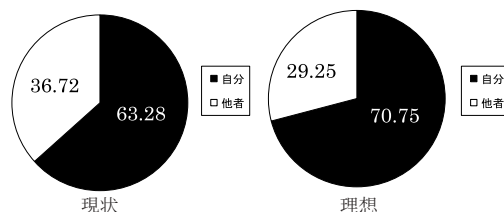


Fig.2 頼る対象としての「自分」と「他者」の割合

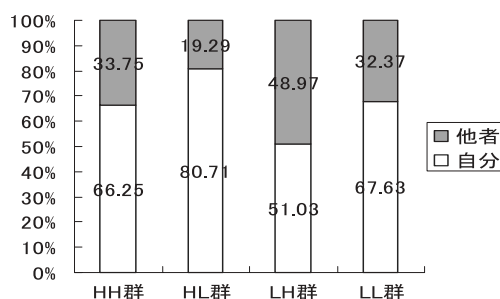


Fig.3 「自立」群別の自分と他者の割合

が有意に低かった（順に $U=168.50, p<.01$; $U=109.5, p<.01$; $U=153.00, p<.01$ ）。この結果をFigure 3に示す。

(2) 依存対象の割合

1) 基礎集計

依存対象として挙げられる人物の比率を算出した結果、現状・理想ともに依存する割合が高いほうから、友人、親、恋人、きょうだいの順になった。依存対象の人数の平均は4.59人 ($SD=1.94$)であり、満足度は5点満点中3.59点 ($SD=1.21$)であった。また理想とする状態における対象の人数は4.62人 ($SD=1.73$)であった。

2) 性差の検討

性差を検討するためマン・ホイットニーの検定を行った結果、友人について男性は女性より有意に高く ($U=4750.50, p<.01$)、親・恋人について女性は男性より有意に高かった（順に $U=5320.50, p<.05$; $U=5019.00, p<.01$ ）。

3) 「自立」群差の検討

現状に対する満足度について、「自立」群差を検討するため、クラスカル・ウォリスの検定を行った結果、両高群は両低群、依存群、自立群よりも有意に高かった（順に $U=92.00, p<.01$; $U=134.50, p<.01$; $U=150.50, p<.05$ ）。

4. 考察

(1) 頼る対象としての「自分」と「他者」の割合

頼る対象としての「自分」と「他者」の割合について、ここでは「自分」の割合が自立の割合であり、「他者」の割合が依存性の割合であると考えられる。また現状に対する満足度について、現状に満足しているということは、本人にとって居心地のいい状態であると考えられるため、第二研究においては現状に対する満足度を主観的な適応指標であると考えられる。

1) 基礎集計

現状における「自分」の割合は6割強であり、現代青年はどちらかというと自立の傾向が高いものの、他者にもある程度依存しているということが読み取れる。また理想とする「自分」の割合は約7割を占め、青年は現状よりもさらに自立の割合を高めたいと志向していることが明らかとなった。これは、一般に自立をよしとする風潮があり、特に青年に関しては周囲からも自立を求められるようになるため、自立を志向するようになるのではないかと考察できる。

2) 性差の検討

男性が女性よりも自立が高く、女性は男性よりも依存性が高いということが明らかになった。これは第一研究の量的な結果が質的にも示されたと解釈でき、すなわち仮説1は質的にも支持されたといえる。既に述べたように、社会的に男性は女性より独立心が強いことを期待されており、他者に頼ることは望ましくないこととされるため、男性のほうが女性より依存性が低くなるのではないかと考えられる。

3) 「自立」群差の検討

自立群が他群より自立の割合が高く、一方依存群が他群より自立の割合が低かった。両高群と両低群は自立群と依存群の中間にあり、同程度であった。心理的自立が高く、対人依存欲求が低い自立群の自立の割合が高く、また心理的自立が低く、対人依存欲求が高い依存群の自立の割合が低いことは、それぞれ群の特徴と一致する。また、両高群と両低群が同程度の自立の割合を示したが、これは実際に量的に同じような状態にあるのではなく、構造は類似しているものの量としての全体値の違いが考えられる。すなわち、全体値としての100のあり方が異なっており、両高群は両低群よりも全体値自体が大きいのではないかと考えられる。

(2) 依存対象の割合

依存対象として挙げられる人物の割合について考察する。また依存対象の人数、現状に対する満足度についても考察する。なお既に述べたように、満足度は第二研究における主観的な適応指標であると考えられる。

1) 基礎集計

依存対象として挙げられる人物は、友人、親、恋人、

きょうだいの順に割合が高かった。依存対象として友人が親を上回った理由として、青年期は子どもでも大人でもないという不安定な立場におかれ、自己を安定させるために、悩みや考えを語り合える親密な友人関係を求めるようになること(久米, 2003)などが考えられる。また安達(1994)は、青年期における葛藤の解決や自己の安定において友人が大きな役割を果たしていることを明らかにした。青年期は社会に出るための準備期として、親からの心理的離乳が求められると同時に、友人関係を発展させる時期であり、依存対象として友人が親を上回ることは、むしろ望ましいことではないだろうか。また現状と理想とを比較してみると、理想とする状態で親の割合が低くなり、恋人の割合が高くなることが示唆された。このことから、青年が親からの心理的離乳を志向していることやより恋人に頼りたいと思っていること、もしくは恋人が欲しいと思っていることなどが推察される。また満足度については、どちらかというと現状に満足している傾向が見出された。

2) 性差の検討

男性は女性よりも友人の割合が高く、女性は男性よりも恋人、親の割合が高かった。小沢・湯沢(1989)は青年期の心理的離乳に関して男女の比較を行い、男性のほうが女性より「親から仲間への離脱」が強く、女性のほうが男性より「親への甘え」が強いことを示している。このことから、依存対象として男性が女性よりも友人の割合が高く、女性が男性より親の割合が高くなったことが説明される。また天貝(2001)が、女子青年は男子青年よりも愛情の対象と情緒的な結合を強く持っていることを明らかにしたことから、女性のほうが男性よりも恋人の割合が高くなったことが説明される。

3) 「自立」群差の検討

依存対象として挙げられる人物については殆ど見られなかったが、現状に対する満足度について、両高群は他のどの群よりも高いという結果が示された。すなわち心理的自立と対人依存欲求がともに高い青年は、そうでない青年より現在の対人関係に満足していることが明らかになった。両高群と自立群との間に差が見られたことから、第一研究において量的に示されなかった対人依存欲求の高低の差が、ここにおいて初めて示されたと解釈できる。満足度は第二研究において適応の指標であり、山野(1991)のいうように生きがい感の一側面であるほか、生きがい感尺度の下位因子にも「現状満足感」という因子が含まれていることから、第二研究において「自立」している青年が、そうでない青年よりも現状に対する満足度が高かったということは、第一研究において量的に支持されなかった仮説2について部分的な示唆が得られた。

総合考察と今後の展望

1. 総合考察

仮説2について、第一研究では対人依存欲求の高低に関わらず、心理的自立が高い青年は、低い青年より生きがい感が高くなることが示され、仮説は十分には支持されなかった。しかし第二研究において、「自立」している青年は、「自立」していない青年よりも、適応の指標である満足度が高かったことから、満足感は生きがい感の一側面である(山野, 1991; 近藤・鎌田, 1998)ことも踏まえ、仮説を補助的に支持することが示唆された。したがって、適応的な自立とは、自立と依存性がともに高い状態であると考えられる。また仮説1については、量的にも質的にも支持され、女性のほうが依存性が高いことが明らかになった。これはいくつかの研究においても示されており(竹澤・小玉, 2004 など)、今回の結果はそれに追従する結果となったといえよう。

青年の「自立」の様相について、現代青年はどちらかという自立の傾向が高いものの、他者にもある程度依存しているということが示された。また現状と理想との比較から、青年は現状よりもさらに自立の度合いを高めたいと志向していることが明らかになった。依存対象として挙げられる人物の割合は、友人、親、恋人、きょうだいの順に高いことが示され、現状と理想の比較から青年期においては親からの心理的離乳が進むとともに、友人関係に重点を置く傾向が示唆された。

2. 今後の展望

本研究では仮説2が量的には十分に支持されなかった。この要因の1つとして、用いた尺度に問題があるのではないだろうか。たとえば、心理的自立尺度の下位因子に「適切な対人関係」という依存性と関連すると思われる因子があることや、依存性を測る尺度として用いた対人依存欲求尺度は、あくまで依存欲求を測るものであり、実際の依存行動を測るものではないということなどである。そのため、使用する尺度の内容や定義についてもさらに吟味する必要がある。また、本研究では適応の指標として生きがい感を用いたが、それによって仮説が十分に支持されなかった可能性も考えられる。一般的精神健康調査票(GHQ)などの、一般的な適応指標との関連を検討することも必要であると思われる。また本研究では適応的な依存性のみに着目したが、今後は依存性について不適応的な依存性との関係性を含めて記述することで、適応的な依存性のあり方についてより実証的な視点から捉えられると考えられる。

謝辞

論文作成に際して貴重なご助言を頂きました九州大学

大学院人間環境学研究院教授の野島一彦先生、田嶋誠一先生には、心からの感謝の念を表して謝辞とさせていただきます。

引用文献

- 安達喜美子 (1994) : 青年期における意味ある他者の研究 とくに異性の友人 (恋人) の意味を中心として 青年心理学研究, 6, 19-27.
- 天貝由美子 2001 現代大学生の依存性に関する一考察 (1) 大阪教育大学紀要 第 部門, 50(1), 79-91.
- 江口恵子 (1966) : 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- Erikson, E. H. (1982) : 自我同一性 : アイデンティティとライフ・サイクル (小此木啓吾訳編) 誠信書房
- 福島朋子 (1992) : 思春期から成人にわたる心理的自立 自立尺度の作成及び発達の検討 発達研究, 8, 67-87.
- 福島朋子 (1993) : 自立に関する概念的考察 青年・成人及び女性を中心として 発達研究, 9, 73-85.
- Giligan, C. (1982) : In a different voice: Psychological theory and women's development. Cambridge:Harvard University Press, 岩男寿美子監訳 もう一つの声 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店
- Havighurst, R.J. (1953) : *Human development an education*. Longmans, Green (荘司雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店)
- 日潟淳子・齊藤誠一 (2007) : 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18(2), 109-119.
- 久留一郎 (2003) : 発達心理臨床学, 悩み, 障害をもつ人間への臨床援助的接近 北大路書房
- 板垣恵子 (2000) : 現代社会を生きる人々の生きがい 東北大医短部紀要, 9(2), 257-266.
- 神谷美恵子 (1966) : 生きがいについて みすず書房
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980) : 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 近藤 勉・鎌田次郎 (1998) : 大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究, 11(1), 73-82.
- 高坂康雅 (2003) : 青年の心理的自立と家族機能との関連 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 44-47.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006) : 青年期における心理的自立 () : 心理的自立尺度の作成 北海道教育大学紀要, 教育科学編, 56(2), 17-30.
- 久米禎子 (2003) : 依存のあり方を通してみた青年期の

- 友人関係 自己の安定性との関連から 京都大学
大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- Markus, H., & Kitayama, S. (1991): Culture and the self:
Implication for cognition, emotion, and motivation.
Psychological Review, 98, 224-253.
- 二宮克美 (1994): 大学生の自己受容性, 充実感ならび
に親子関係の認知: 質問紙調査結果の基礎的分析
愛知学院大学教養部紀要, 42(1), 97-117.
- 大野 久 (1984): 現代青年の充実感に関する一研究
現代日本青年の心情モデルについての検討 教育
心理学研究, 32(2), 12-21.
- 小沢一仁・湯沢理恵子 (1989): 青年期の心理的離乳と
同一性 心理的離乳尺度の作成と同一性地位との関
連 帝京学園短期大学研究紀要, 3, 63-74.
- 佐藤文子・田中弘子 (1971): 「生きがい」の心理学的研
究の試み 1 日本心理学会第 35 回大会発表論文集,
509-512.
- 高橋恵子 (1968): 依存性の発達の研究 大学生女子の
依存性 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 竹澤みどり (2008): 自律的な依存の仕方が依存後の自
己成長感に及ぼす影響について 筑波大学心理学研
究, 35, 65-72.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004): 青年期後期における依
存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52,
310-319.
- 渡邊恵子 (1990): 自立の概念化の試み 日本女子大学
紀要 (人間社会学部), 1, 189-206.
- 山野 晃 (1991): 「生きがい」と「自己実現」 人間性
心理学研究, 9, 14-2.